

「沖縄の可能性に向かって」

レキオファーマ株式会社 代表取締役 ● 奥 キヌ子



新

薬の開発には大きな組織力と膨大な資金に加えて長い年月が掛かります。2005年度の厚生労働省医政局の資料によれば日本国内で1つの新薬を開発するのに9年～17年の年月と500億円の開発費を要するとあります。そんなことも知らないまま、私どもは創薬のベンチャーを立上げ、痔疾患治療薬の開発に取り組んだのです。

会社立上げから様々な紆余曲折の14年を経て新薬を発売することができました。日本における創薬ベンチャーとしては初の快挙となりましたが、振り返れば、医薬品開発について知識を有してなかったからこそ進めた無謀な道程でした。医薬品開発へのきっかけは中国の痔治療薬「消痔霊」との出会いでした。学生の頃、所属していた中国語クラブの先輩が紹介してくれたものです。台湾留学の経験があった私にとって中国は今もそうですが、ごく身近な存在で、すぐに北京へ行き消痔霊の発明者を訪ねました。中国ではすでに臨床例が多くあり、手術の必要な重度の痔を切らずに治すという、画期的な効能を持つ注射薬だと教えられました。「改革開放」政策で中国経済を大きく発展させた中興の祖、鄧小平の治療にも使用されたというエピソードも伺いました。

わが沖縄は今なお基地問題で揺れる基地の島です。学生の頃から基地経済からの脱却と自立できる産業興しを焦がれるように模索していた身には、これほどの薬効を持つ薬なら産業になる！と光明を見た思いで飛びつきました。日本人の3人に1人が痔といわれる統計もあり、市場は大きいと考えました。さらに製品が小さく、島国のハンディである流通コストを抑えることができます。また、競合する既存薬が存在しないこと、手術に

代わる薬剤となれば競争力を持ち、知的産業として世界市場へも出て行けると夢を膨らませました。

しかしながら取り組んだ開発の道のりは、想像を遙かに超えて厳しく、何度となく大きな壁にぶつかったものです。多くの方々に支援の手を借り、特に共同開発パートナーの田辺三菱製薬さんの力添えをいただいて、新薬発売に漕ぎ着けることができました。

念願の発売から5年目を迎える現在、弊社では、新たな医薬品開発と平行して地元沖縄由来の植物の活性に注目し、病気の予防につながる食品の開発にも取り組んでおります。やはり地元にとだわりをもつて事業を継続したいと考えております。

沖縄の女性が長年にわたって長寿世界一を維持していることは、誇るべき沖縄ブランドであり、最大の武器だと思っております。先人達が時代と経験を積み上げて築いた医食同源の教えは沖縄の大きな財産ですから私たちがしっかりと受け継いで行かなければなりません。先人達の教えに新しい科学の

目をあてて、詳細な効能効果や薬理作用を解明し、付加価値を載せて後世に繋いでいくのが現在に生きる私たちに課せられた役目だと思っております。願わくば沖縄の男性陣の長寿世界一も是非奪還したいものです。

さらに、イノベーションによって沖縄の可能性を広げていくことも大事だと考えております。『イノベーション』は全く新たな発明発見であるのではなく、既存の物を革新的に組み合わせることによって新しい価値を生むことだ」と述べられた著名な企業人の言葉に感銘を受けました。何も大上段に構えるのではなく、日常の中で目的意識を持ってアンテナを張ることでヒントを掴み、アイデアが生まれるのだと気付かされました。身近な足元に大変革をもたらす様々なチャンスが潜んでいます。

今、医療は治療から予防の時代へ向かっております。沖縄には多種多様な植物や食材があり、未知なる可能性を秘めているのです。これからの時代に沖縄の果たす役割と可能性は大なるものと自負致しております。